

2021年5月30日  
宮崎中部教会主日礼拝  
牧師 乾元美

詩編 91 : 1～16

ルカによる福音書 13 : 31～35

「神の翼の下に」

<ガリラヤからエルサレムへ>

今日の聖書箇所は、一度聞いただけでは、ちょっと内容が分かりにくいと感じるかも知れません。「エルサレム」という地名が何度も出て来ます。エルサレムは、ユダヤ人たちの神殿がある礼拝の中心地、心の拠り所のような場所です。

そしてこの聖書の箇所において、イエスさまは弟子たちと共に、ガリラヤという場所から、南へ下って、今エルサレムへ向かって旅をしておられる途中なのです。

イエスさまはこの時、強い決意をもって、はっきりとした目的をもって、エルサレムへ向かっておられます。そのことはまず、ルカによる福音書 9 : 51 に出てきました。

「イエスは、天に上げられる時期が近づくと、エルサレムに向かう決意を固められた。」

「天に上げられる時期」というのは、イエスさまが十字架に架けられること。そして、三日目に復活させられること。そして、天に上げられることを意味しています。この御業を成し遂げるために、イエスさまはエルサレムへと向かっておられるのです。

神の御子イエスさまは、すべての人の罪をご自分の背に担い、滅びの死を引き受け、そして、イエスさまの救いを信じるすべての者に復活の命を与えるため、この御業を成し遂げようとしておられます。こうして、すべての人の救い主となり、救いを実現するためです。

このことは、旧約聖書の時代から父なる神さまが、イスラエルの民に預言者を通して語ってこられたことでした。その預言の通りに、今イエスさまは救いを実現しようと、エルサレムへと向かっておられるのです。

ですからこれまでイエスさまは、エルサレムへ向かう道中、いつも会堂で人々に教えてこられました。イエスさまが神の子であり、救い主であること。イエスさまが罪の支配から解放して下さる方であり、神の国、神さまのご支配を実現して下さる、ということです。

そしてイエスさまは、人々に何度も語ってこられたのです。「だから今この時に、あなたたちは神さまの御許に帰ってきなさい。立ち帰りなさい。悔い改めて、わたしが命を捨ててあなたたちに与えようとしている罪の赦しを、新しい命を、救いの恵みを受け取りなさい。」

イエスさまに出会い、教えを聞いて、従う者もたくさんいました。しかし、イエスさまを救い主と認めない者も多くいました。認めない者の代表が、まさに今日の 31 節に出て来る、ファリサイ派と呼ばれる人々です。

今日の聖書箇所は、エルサレムへ向かう途中で、まだガリラヤ地方を出ていないイエスさまに、このファリサイ派の人々が語りかけている場面なのです。

<エルサレムへ向かう理由>

さて、31 節にはこうあります。「ちょうどそのとき、ファリサイ派の人々が何人か近寄って来て、イエスに言った。『ここを立ち去ってください。ヘロデがあなたを殺そうとしています。』」

ヘロデというのは、ルカによる福音書 3 章 1 節に登場していました。そこには「皇帝ティベリウスの治世の第十五年、ポンティオ・ピラトがユダヤの総督、ヘロデがガリラヤの領主、その兄弟フィリポがイトラヤとトラコン地方の領主、リサニアがアビレネの領主、アンナスとカイアファとが大祭司であったとき、神の言葉が荒野でザカリアの子ヨハネに降った。」とありました。

洗礼者ヨハネの活動が述べられているシーンです。ここに、「ヘロデがガリラヤの領主」とあります。当時ヘロデは、ガリラヤ地方の支配者だったのです。

そしてこのヘロデは、9 章 7 節以下で、洗礼者ヨハネの首をはねたこと。またイエスさまが力ある業を行ない、一体何者なのかと人々の噂になっているのを聞いて、「イエスに会ってみたいと思った」ということが語られていました。

そんなヘロデが、今や自分の支配の邪魔になると思って、イエスさまを殺そうとしている。だから一日も早く、このガリラヤ地方から出て行った方がいい。ファリサイ派の人々はそう告げに来たのです。

これは、イエスさまを気遣った親切なのでしょうか。…おそらくそうではなくて、ガリラヤにいるファリサイ派の人々もまた、イエスさまのことを煙たく思っており、自分たちこそ、早くガリラヤから出て行ってもらいたい、と思っていたのではないのでしょうか。

それで、イエスさまは彼らにこう答えられました。「行って、あの狐に、『今日も明日も、悪霊を追い出し、病気をいやし、三日目にすべてを終える』とわたしが言ったと伝えなさい。だが、わたしは今日も明日も、その次の日も自分の道を進まねばならない。預言者がエルサレム以外の所で死ぬことは、ありえないからだ。」

「あの狐」。ずる賢さを非難する激しい言葉です。そのヘロデに「今日も明日も、悪霊を追い出し、病気をいやし、三日目にすべてを終える」と伝えなさい、と言われたのです。

悪霊を追い出し、病気をいやす。それはイエスさまが、神の国の教え、悔い改めへの招きと共に、神の力の「しるし」として行なってこられた御業です。それを、ヘロデやファリサイ派の妨害に関わらず、今日も明日も、変わらずに続けていく、ということです。

しかし、「三日目にすべてを終える」と言われました。この場合の「三日目」は、ここでは明後日にでも、つまり「すぐにでも」という意味でしょう。もう、業を終える時が近づい

ているのです。あなたたちが立ち去れとか、殺すとか言わなくても、この業を終える時は近づいているのだ、ということです。

そして、更にこう言われました。「だが、わたしは今日も明日も、その次の日も自分の道を進まねばならない。預言者がエルサレム以外の所で死ぬことは、ありえないからだ。」

イエスさまは、言われたのです。「あなたたちは、わたしを殺そうとする。ここから立ち去らせようとする。だが、今日も明日も、その次の日も、わたしには歩むべき道があり、その道を進まなければならないのだ。」

イエスさまは、ご自分の意志で、目的をもって、今までも、これからも、ご自分の道を進んで行かれるのです。エルサレムへと向かわれるのです。

よく考えれば、ヘロデやファリサイ派の人々がガリラヤから追い出そうとしなくても、イエスさまはエルサレムへ向かっておられるのですから、その内にご自分からガリラヤを出て行かれるのです。しかし、そうやってガリラヤから出て行くのは、ヘロデに脅されたからとか、無理矢理追い出されたとか、恐ろしくて逃げ去ったというような理由ではない、ということです。

これからガリラヤを出られるのは、はっきりとした「エルサレムへ向かう」という目的のためなのです。それが、イエスさまが歩むべき、定められた道だからです。父なる神さまの示されたご計画の道だからです。

#### <預言者殺し>

そしてイエスさまはその理由を、「預言者がエルサレム以外の所で死ぬことは、ありえないからだ」と語られました。イエスさまは、自分はエルサレムで死ぬことになる、それが自分の進むべき道だ、と仰っているのです。

預言者とは、神さまの御心を告げるために、神さまに選ばれ、人々に遣わされた者たちです。旧約聖書の時代から、神の民イスラエルには、何度も預言者が遣わされ、神さまの御心を語り、悔い改めを促し、民を導いてきました。

しかし、34 節にあるように、民は「これまで預言者たちを殺し、自分に遣わされた人々を石で打ち殺」してきたのです。神さまの御心を受け入れることが出来なかったらからです。神さまの御言葉に反発したからです。

石で打ち殺すというのは、特に神さまを冒瀆した者を処刑する方法です。神さまに遣わされ、その御言葉を告げる者を、神さまを冒瀆したと言って殺す。これは、神さまに直接刃向かうようなことです。このような罪を、神の民は繰り返してきました。

そして今や、これらの預言者の最後で最高の方、神の御子イエスさまが遣わされたのです。

しかしイエスさまは、それでも人々がご自分を受け入れず、神の国の教えを信じず、悔い改めないで神に逆らい、ご自分を十字架につける、ということをご存知なのです。この後、

神を礼拝する中心地のエルサレムで、すべての人々の、すべての罪が極まって、神の御子を殺すという、神さまへの究極の背きが現されるのです。

しかし、それでもイエスさまはエルサレムへ向かって行かれる。イエスさまはそうして、すべての人々の罪を、ご自分の身に引き受け、ご自分の命によって贖おうとしておられるからです。イエスさまは、その御業のために。エルサレムで十字架に架かって死ぬために、道を進んで行かれるのです。

#### <三日目にすべてを終える>

そしてイエスさまは、これから起こることについて、32節で「三日目にすべてを終える」と言われました。先ほどは、それは「もうすぐにでも」御業が終わりを迎える、という意味があることを見て来ました。そしてもう一つ、この「三日目」というのは、十字架に架けられた後、ずばり「三日目」に復活されることを示していると考えられます。

また、「すべてを終える」という言葉は、厳密には「完成させられる」という言葉で、受身形で書かれています。

つまり、イエスさまが十字架に架けられた後、その御業は、父なる神さまによって完成させられるのです。父なる神さまが、十字架の死によって罪の贖いを成し遂げられたイエスさまを、死者の中から復活させて下さるのです。そうして、イエスさまの十字架の死を、すべての人のための罪の贖いとして、完成させて下さるのです。

イエスさまは、その父なる神さまの御手に信頼して、このご計画に従順に従い、ご自分の歩むべき道を進んで行かれるのです。

#### <翼の下に>

このように、ヘロデの殺意の中で、ファリサイ派の人々の敵意の中で、人々の不従順の中で。それでもイエスさまはエルサレムへ向かわれます。

なぜ、そこまでして下さるのでしょうか。それは、34節の御言葉に表されています。

「エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、自分に遣わされた人々を石で打ち殺す者よ、めん鳥が雛を羽の下に集めるように、わたしはお前の子らを何度集めようとしたことか。だが、お前たちは応じようとしなかった。」

イエスさまは、ご自分を殺そうとする者たちに、神さまに逆らい、背くすべての者たちに言われるのです。「めん鳥が雛を羽の下に集めるように、わたしはお前の子らを何度集めようとしたことか。」これが、イエスさまの御心であり、イエスさまを遣わされた父なる神さまの御心です。

すべての人々は、わたしたちは、鳥の雛のようなものです。自分だけでは生きられません。親鳥にエサを与えてもらい、翼の下で温めてもらい、敵から守ってもらい、側から離れないようにしなければ、すぐに死んでしまうのです。しかし、雛はその自覚がなく、勝手に翼の外に飛び出してしまう。自分の力のなさを知らず、親鳥から離れてしまう。

同じようにわたしたちも、神さまから離れて、自分の力を過信して、神さまに頼ることを

やめて、自ら困難へと、罪へと、滅びへと、向かってしまっているのです。

しかし、なぜ人々は、わたしたちは、神さまの守りを受け入れず、翼の外へ出ようとするのでしょうか。

それは、ヘロデやファリサイ派の人々がそうであったように、自分たちが思う平安、自分たちが願う守りや、救いを求めているからではないでしょうか。自分の支配者としての身分が、安泰であるように。自分たちが守ってきたことが評価され、報われるように。自分たちの地位が守られるように。自分が持っているものが失われないように。わたしたちもまた、神さまの救いを、そのように自分に都合のよいものにしようとしているかも知れません。

しかし、イエスさまが与えようとして下さっているのは、それらすべてのものが失われてもなお動かされない、神さまのご支配です。

その神さまのご支配に入るためには、神さまからの恵みを受け取るためには、自分が拠り所として握っているものを手放し、自分には何もないことを認め、神さまにひたすら依り頼み、身を委ねなければならないのです。自分が神さまなしには生きられないことを、認めなければならないのです。

自分で自分を守りたい者や、自分のものを手放したくない者にとっては、このイエスさまの恵みへの招きは、大きな葛藤と、自分の価値観との衝突を引き起こします。それに耐えられないから、受け入れられないから、イエスさまの御言葉に耳を塞ぎ、恵みに目を閉じ、招きに応えようとしません。それどころか、神の御言葉を抹殺しようとしさえするのです。

しかし神さまは、わたしたちがそのままでは滅びへ向かうことをご存知です。そして、背き続けるわたしたちを、それでもなお深く愛し、ご自分の御子の命を犠牲にしてでも救いたいと思う程に、憐れんで下さるのです。一人一人の名を、神さまは何度も何度も呼び、ご自分の翼の下に入るようにと、招き続けて下さっています。何度も何度も、御自分の恵みの下に、集めようとして下さっています。

旧約聖書の本日読まれた箇所、詩編 91 編 4 節に、このような御言葉がありました。

「神は羽をもってあなたを覆い／翼の下にかばってください。」

旧約聖書の時代から、神さまは、人々を翼の下に覆い、かばい、恵みの内に養ってこられたのです。そして、恵みを忘れて神さまに背き、逆らう人々が、御許に立ち帰ることを、何度も何度も願ってこられたのです。そして、とうとう神の御子イエスさまが遣わされて、その父なる神さまの御心を人々に語られたのです。「めん鳥が雛を羽の下に集めるように、わたしはお前の子らを何度集めようとしたことか。」

イエスさまは、父なる神さまの御心を人々に教えて下さり、またご自分もまさに命をかけて、神さまの翼の下に入るようにと、何度も何度も招いて下さったのです。

「だが、お前たちは応じようとしなかった。」

イエスさまは、どれだけ悲しい思いでこの言葉を語られたのでしょうか。どれだけ教えても聞かない。どれだけ招いても来ない。どれだけ恵みを注いでも受け取ろうとしない。

そしてとうとう、殺そうとする。深刻な、滅びへ向かう人々の罪を、イエスさまは見つめておられるのです。

#### <救いへの招き>

そして、イエスさまは 35 節でこう言われました。「見よ、お前たちの家は見捨てられる。」

イエスさまは、とうとう愛想が尽きてしまったのでしょうか。逆らい、恵みを受け入れない人々は、もう知らない。勝手に滅びるがよい。もう見捨てる、と宣言されたのでしょうか。

そうではありません。イエスさまは、こう続けておられます。「言うておくが、お前たちは、『主の名によって来られる方に、祝福があるように』と言う時が来るまで、決してわたしを見ることがない。」

この「主の名によって来られる方に、祝福があるように」というのは、詩編 118:26 にある、「祝福あれ、主の御名によって来る人に」というところの引用です。

「主の御名によって来る人」とは、イスラエルの民が待ち望んでいたメシア、将来に来たるべき救い主を指しています。イエスさまのことです。今ここに立ち、語っておられるイエスさまのことです。

イエスさまは人々に、このわたしを救い主と告白する時が来るまで、決してわたしを見ることがない、と言われました。しかし、イエスさまを救い主と告白するなら、人々はイエスさまと見（まみ）え、救いに与ることが出来るのです。

今、イエスさまが語りかけている者たちは、その目で、目の前のイエスさまを見ているはずですが、しかし、救い主として見つめていない。罪から解放して下さる方であると信じない。そうして、差し出された救いの御手を振り払おうとしているのです。そのままだと、終わりの日にその罪は裁かれます。なぜなら、今、目の前に差し出されている罪の赦しを、受け取らずに投げ捨てようとしているのですから、それは当然です。そして、その終わりの日、裁きの日は、いつ来るか分からないのです。

だから、イエスさまは、「わたしが語りかけているこの時に、あなたを招いているこの時に、あなたたちはわたしを受け入れなさい。わたしを信じて告白し、救い主であるわたしを見つめなさい。」そう言って、イエスさまの招きに応えることを、悔い改めることを、ここでまた人々に強く促しておられるのです。

このことは 12 章の終わりから 13 章にかけて、イエスさまがずっと人々に語り続け、招き続け、求め続けてこられたことです。終わりの日が来る前に、人々が神の翼の下に、神のご支配の下に、神の救いの下に来ることを、何度も何度も願っておられるのです。

「見よ、お前たちの家は見捨てられる。」しかし、それをわたしが願うだろうか。わたしは何度も何度も、あなたたちを集めようとしている。今こそ、わたしを信じなさい。わたし

が遣わされた救い主であり、あなたの罪を赦す者であり、あなたに復活の命を与える者だ。終わりの日が来る前に、わたしを信じ、神の翼の下に入りなさい。

…これは、当時の人々にだけ語られているものではありません。今のわたしたちにもまた、イエスさまは終わりの日が来る前に、御言葉に耳を傾け、イエスさまを救い主として受け入れ、救いへの招きに応えなさい、と言っておられるのです。

わたしたちは今や、イエスさまの十字架によって罪の赦しを宣言され、父なる神さまがイエスさまを復活させ、天に上げて下さった、その御業の完成を知る者とされています。

そしてなお、父なる神さまは、終わりの日まで、このイエスさまの救いへ、神さまの恵みの翼の下へと、聖霊なる神さまによってわたしたちを集めようとしておられるのです。世界中にその翼を広げて、人々をその下で生かし、養い、守り、導こうとしておられるのです。

わたしたちは、イエスさまがご自分の命を捨ててまで与えて下さった罪の赦しを、復活の命を、感謝して受け取りたいのです。神さまの翼の下に喜んで集い、安心して身を寄せ、羽に覆われて、その守りのうちに憩いたいのです。

わたしたちは、神さまの翼の陰に宿るならば、どんな苦難の中にあっても、どんな弱さに打ちめされても、あらゆるものを失っても、神さまの力に覆われて、かばわれて、神さまの懐の中にあって、まことの平安と、慰めと、命を得ることが出来るのです。

イエスさまは、誰もお見捨てになりません。神から離れ、御心に背き、イエスさまを鞭打ち、唾を吐いた者でさえ、イエスさまは赦そうとしておられるのです。

なぜなら、イエスさまの十字架の死は、背いた者たちの罪をこそ担うためのものだからです。殺意も、敵意も、無関心も、軽蔑も、裏切りも、すべてを見つめて、すべてを引き受けて、イエスさまはその神さまへのすべての人々の罪を、わたしたちの罪を、御自分の十字架の死と共に、エルサレムの地で磔にして下さったのです。

そして、救いの翼を目一杯広げて、わたしたちが立ち帰ることを、救いへの招きに応えることを、忍耐して待っておられるのです。

「主の名によって来られる方に、祝福があるように。」わたしたちも、この十字架と復活のイエスさまを救い主と信じ、受け入れ、救いの招きに応えたいのです。イエスさまに罪を担われて、赦されて、神の翼の下に宿る者とされたいのです。

## 【お祈り】

天の父なる神さま

あなたは御自分の翼の下に、わたしたちを覆って下さいます。あなたの御許こそ、まったく安全であり、平安であり、わたしたちが世のどのような困難にあっても、唯一の慰めを得られるところです。

イエスさまが、ご自分の命を与えて、わたしたちの罪を赦し、あなたの御許へ行く道を備えて下さいました。どうかわたしたちが、喜びと感謝を持って、ただあなたにのみ救いと慰めを求めて、あなたの翼の陰に喜んで宿ることが出来るようにして下さい。

神の翼の下にある恵みと幸いを、知ることが出来るようにして下さい。

救い主イエスさまによって、わたしたちが受け入れられていることを感謝して、御名によってお祈りいたします。アーメン